

糧食と腹一杯種人だ 標橋で大塚に会った 甲需部で少少の倉の  
 東奔西走で足が疲れた 自轉車に付けたし 土は黒い  
 0900頃 敵B-17が7機未装に来た 丁度甲需部の前には立つ屋がある  
 真上には赤雲で反撃して逃げた 253の零戦が1機で追いついたかは  
 定かた相成" 17. 8. 29

0900以後 125 即降 1100 0-1 前に出た 22-150Fに500 川内と共  
 B-17 4機 1321 発見 1324 爆弾 20 撃 破壊した 地点 S4°36'40"  
 E 152°31'

私が標橋に上った時は赤雲が敵機は発見された屋に付たが二機連て走つて  
 危ね 215に右20° 高角70°に B-17を四機発見した 大311の近く見えた  
 が八千の一万ある1533 輪隊が雲向を5555した 水平爆撃を避けて  
 3400 発見を取つて233内には左舷尾から川内の方には 爆弾はぶちまけた壁の

W

標心立った 位置は 20 解と言ったが私にはあつた標に見えた 4 標は  
このまゝ、滑之つた 5 標の母を又攻撃するらしい 初めの 5 標の 1 標は  
である

海は相対的荒れつた 八時頃は曇つたので 二番艇も川内も見えなかつた  
雷が近くなつた山際を 一時は雨が清い標がなつた 明日 0600 時-1320 時  
は着く 光が直ぐ陸岳を東を照らす 5 標-10 標が 6 箇種を照らす 夜  
の内に獲つ置かう 別に虚言も書かぬ ----- 別に死んだら 11 時  
へ 5 標 日本 の 勝負、戦後若くは今後の産業経済指導等、5 標 11 時 考へる時  
は生きた活躍したと思ふが ----- 冷血漢と書はば喜ん ぐとくたした  
折で生死は自分では判らぬが 17. 8. 30

0600 時-1320 時 入港した 夕霧、白雲が居た 0951 日-17 一様未幾  
140° 方向 1 万米 遂に爆弾は蒸たぬかつた 0955 射撃開始 18 解 爆

密に利用し、戦物に自落を繰返した。陸女は仲々集まらぬ。我々は9月1日 明日  
 出陣以上陸を進行する予定である。ガレキの海がボロボロである。2230着予定。敵  
 の銃斗数は仲々強くない。0730日は中夜に半放銃するらしい。明日は2230着予定  
 だと軍中陸兵150名と上陸させる。軽爆弾が相当数落ちるらしい。夜迄は発見され  
 ないかと半成功の。敵の機動部隊が例の7000部隊の東南に集まらぬ  
 Bx1. Gx1 甚だ他である。是非成功したい。やられる可能性は充分にある  
 俺が戦死する可能性は充分にある。やむを得ず奮闘を奮かかれば必ず敵を倒す  
 17. 8. 31

... 何にせよ旅行に出る前、何にせよ旅の準備は充分にしておく。特攻隊の  
 男がが出陣する前、何にせよ旅の準備は充分にしておく。特攻隊の  
 男がが出陣する前、何にせよ旅の準備は充分にしておく。特攻隊の

17. 8. 31

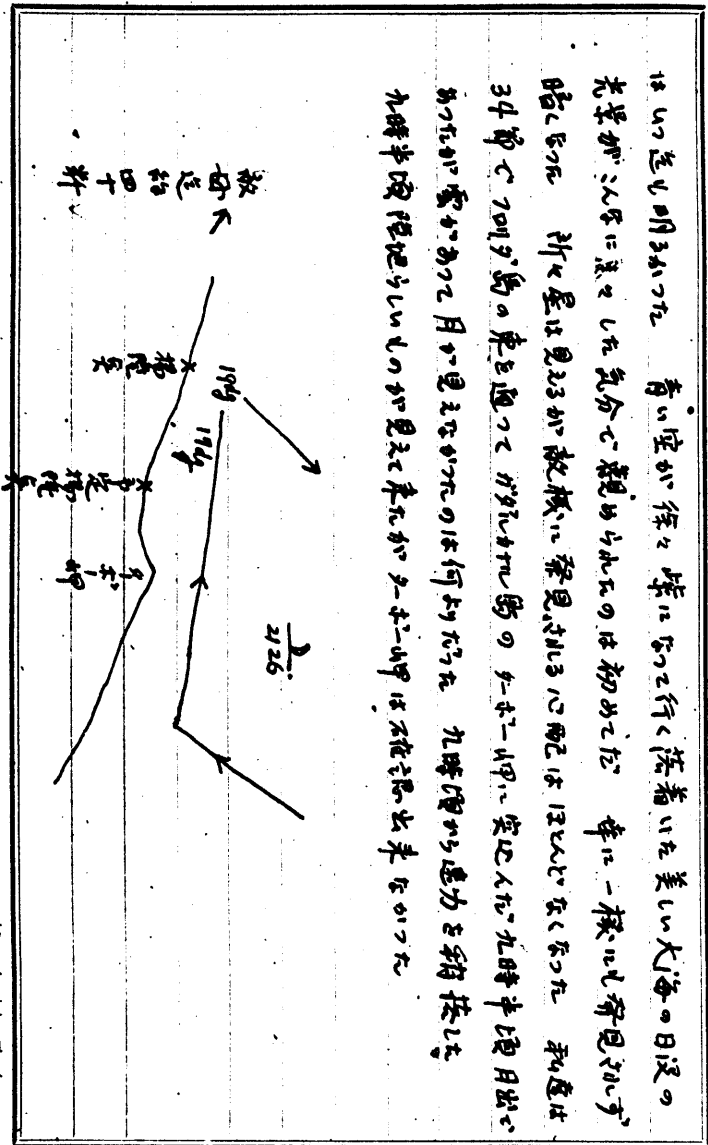


14	月	0524 小艦2	0835	B-17 x1	0941	B-17 x1	1030	小艦2	1110	大艦1	1241	大艦1
15	火	0545 大艦	0615	B-17 x1	0615	B-17 x1	1330	小艦2	1330	小艦2	1330	小艦2
16	水	0045 小艦2	0520	小艦x1	0618	B-17 x1	0800	小艦x14				
17	木	0700	1045	B-17 x1	大々	本艦	第一回	回塔出	午後	日青丸	大艦1	大艦1

0630 我々は出港した 砲台は0200 発見して来た 174名である 0845 中水道  
 に到着中攻に戦斗機。大編隊が我々を造り越して征つた 必勝である  
 必勝 唯之有るのみ 17. 9. 1 0849

午前中は満天雲の故には敵の掃蕩される気遣いにはおそれなかった。だが午後11時と  
 音聲が所々出て来た。爆撃機は取つては本建好の條件と定つた 1055に P-40 5機  
 が三機、左に見張りが我々と発見しあつた。本艦である 二〇日程日暮の遠く  
 に我々はあつた。日没は午後20分30秒であつたが中には暗く味方を見ることが出来た。西の方

はこのように明かした 青い空が徐々に紫に染まり行く落着いた美しい大海の日没の  
 光景が心に残った 先分て親めが水色の初めは 幸に一概に青見知らず  
 暗い夜の 折々星は見えれば故郷に 黎見られる心配は 12月には 来た  
 34年7月21日の夜を通過して 折々星は見えれば 夕暮一瞬に 突如人知れぬ時中頃月出に  
 ありながら 雲が 2月1日の夜を通過して 何れか 夕暮一瞬に 突如人知れぬ時中頃月出に  
 九時半頃 霞は 2月1日の夜を通過して 夕暮一瞬に 突如人知れぬ時中頃月出に



東側の侵入に會同の信号を待つたが白灯は仲々現れず一時引き退へた。11時  
40分には17時が後方から来り機銃を開放すると言ふので部隊は停止して内大艇浮舟  
を下し、これにこれに十時三十分であった。後で思ふに9-1-4甲より大部西側から来た  
味方の大艇は何も通へず、予定は狂つた。2305第一回目が出發した。これに  
陸軍は着いたと思つた。突然小銃と軽機銃の音が陸から聞えた。機銃は5分  
11時29分遂に敵機が来た。激斗は3分、これが二機、相打ちで、偵察を行つた  
百米位は折れた。飛来は可能性は充分にある。飛機は、青白く、火筒が流墨  
。標高は、月は機銃作響と同時には、煙が、出た。大部明かされた。零時は第二回  
が出發した。予定は、遅れ、夜が明け、心配がある。この半、11時、切上げ、車と、  
0045 内大艇が、一と上中、敵機、この、浮舟を、離した。敵機が、来た、この、  
迄、の、気味、悪く、言つた、この、月、は、高、く、空、に、水、で、明、く、な、つ、た。陸、兵  
0.1010 した、作、業、は、實際、見、る、と、驚、か、し、く、は、本、軍、が、居、た。0045 機、銃、は、  
0が、三、機、機、隊、で、左、舷、尾、を、右、舷、に、かわ、つ、た。直、に、出、港、した。船、隊、が、残、る

かなり高速度を出せる。是事乗速で中より行かぬは存じながら。0052母艦三機  
 編隊がやがて来。0100から0105迄の約5分間は入機中。来。内2~3機  
 は数斗機をしのぎ。其等が頭の上に来。我々は、9をう返して避ける。こ  
 う5分間は長く感ぜられた。0135速度を上へたとした時、敵機が突撃弾を打  
 った。赤十字の弾が中より空に吸い込まれた。5分位置にて又打った。KAW'S  
 全速で北に懸退した。向いて、時々厚い低い雲が月を覆ふ。標は、11と2-  
 が中に来た。私は三時頃迄、既橋に立つて居た。一時間程土直密で寝て四時  
 頃、船橋に行つた。標が中より来た。標一杯雲に隠れた。時々、2-と3-  
 が来り、大穴と一緒に来た。打撃は、0度全速で走つた。KAW'S 285度で  
 返して、北に懸退した。波が中より大却中した。入港して直に、鳴る。油と  
 3-と2-が中より受取つた。標は、31-と2-が来た。明日又来る。非  
 常に、既。

外紀は、7-と1-が中より大却敵。近の方面上つて来た。其前線で、艦隊も味方が



今晚上下は知行に打つてゐる 教波の行は糧食が三程減死 五〜六名も第  
教波の第一者重傷二名輕傷ありた 舟大艇は少す少す欠か用ゐるが  
連絡の不確實が不成功の最大の原因だ 19. 8. 2

北母は故岳が揚つて友軍は全滅に瀕して居る 海上の連絡も出来ぬ  
中木は何をして居るのか 外南洋に陸岳を以て揚が敵軍基地を固められ  
ば米軍は心ん中が来る つけぬかると恐しむ勢を捕らぬ 今の内には  
いゝ全滅させねばならぬ 陣内問題にどうするのぞ 外南洋を駆逐艦はか  
り心寄つてどうするのぞ 攻撃は少教といふが防禦は敵の二倍三倍の兵力が  
要るので 敵軍母艦が四隻位沈んだらと言つて手も出るのにはどうし  
んか

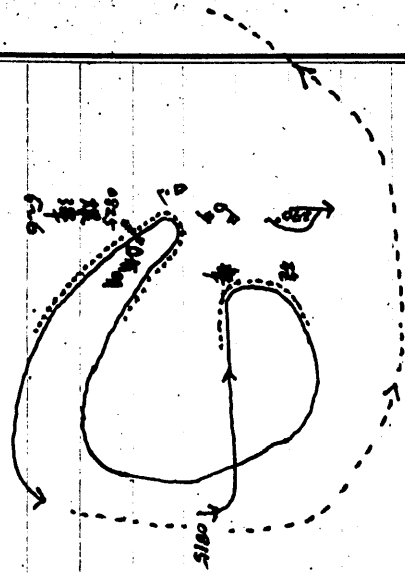
がわいふとラビを確保されてどうするのぞ 次はラベウに米軍するにきつて居る  
日本。面目は丸潰れ 作戦は日茶 日茶に居るではなにか 既に外南洋の



十時三十分に第二回 十一時五十分に第三回が出發して全射終了 陸上の舟艇が四隻  
 来り早い 十一時四十七分には短艇も掃收し終つて出港した 夕立達は我々の着  
 と同じ様に出現した 十時五十分頃がウカロト方面で砲撃の火光が見えた 夕立  
 艇がウカロトと見えた 此の船行場の敵艇には判りなかつた 砲撃は我々が  
 出現する頃迄続いた 此の船は同敵艇に敵二隻大発見。電報が入つた 同レ  
 尔二隻は敵艇の和音が来た 我々は彼等を視察する前には獲物を取つた此が  
 口惜しかり 十一時七分頃が吊橋のウカロト方面で若うな敵のウカロト巨艦  
 はウカロト測区は星の光音が望遠鏡で見ると煙の尾を引いて吊橋に近づいて  
 来る 第一撃は 11時7分09.15分迄も若うな居た 四撃程見えた 巨艦が来る  
 迄は我々が発見したものと見えた 此の光は舟艇 核動力部隊が行つた川内七  
 隈から来る 敵艇は遂に一枚も現れなかつた 海は静かに四十米の高さの  
 0.450-70の雲々に見える 石狩灣の白浪がよみ分つた 3相りかぶつて耳を澄ませ  
 ば一と一と云ふ音が聞えた 敵は既に夕立艇がウカロトの我々には北に3-2

と取つて返す方向に敵を見つかるのを安心して夜明迄獲る。

五日朝起すに見ると天気は曇り 敵は午前と見ゆ 果して8時十五分は敵機  
の来は 新習を利用して敵の来は 察見しは時は速く中攻めはと云つて  
度は九十度方向の真直ぐに来るのを見せ 本朝は敵機 本一隊、四隊は



攻撃隊は一旦同行して敵を避避して向て  
out range を反航して右後方の時喰以下  
来は 本隊を振り度と標的は敵機は  
恐ろしく 有明の上空に取航して及航して  
右後方の避避して 反航の前の航して  
有明の短尾百米位の時で5~6架の水柱  
が立上る 弾が大量の時は有明の中程  
にありて B-17は中程の out range と同  
航して廻つて左に射度に見ると敵機は 実は



今朝 Co. も 20 近い差が別達力も 4k 少く 10 時 29 分の位置は相当地喰ひ違つて  
 居るし 船に 3900 呎 230 里圏外にあるから未だに思つた 果して 2 時半  
 入港する迄来らなかつた 夕方日没頃 東風孔より補給し 鳴戸の又 3-カ  
 と最中を受けて来た 今夜は 4 時 45 分 北に在る  
 7 日母にて 果腹 3 時が 悲鳴を上げて居る 宣傳者は 自決と云ふ事だ  
 南威艇の生残者を 收容して居るやいふ 舟艇隊の部隊は 5k まで今朝 5 時  
 頃 4900 呎 島西北端に着く迄 500 呎の 2 3 分の 爆撃を喰つたかも知  
 らぬ 5 日 2 時 15 分と 7 日 0 時 15 分 本島を片づける事が 今 9 時 大切だ  
 先迄を完全に見えぬ後は 持たぬが 概動機は 何れも未だ  
 「待合」の 高さは 500 呎 知れぬが 確に 林美英子の 作品に於て 朝鮮人の  
 穿た 石油 200 を買つて使つたの 子供が 飛行機に 飛行機だ。と云つた言ふ程  
 である 今度出見ると 意地附の 噴煙塔が 下層 爆音の 標に 圍らぬ 10 時  
 林美英子の 20 話を 思ひ出さ 今 日 B-17 が 有明を 爆撃して 意地附に 10 時



20-11 電雲の爲視界が悪く敵飛行場の砲撃をへら出来ぬ 遂に引きかへ  
し 途中少し視界がよくなる中であつたが又引きかへたが砲撃は出来ぬ  
つた 中隊の北側を通つて敵機は 少く有明と従へて四度艦台とやつて来たの  
にと思ふと癪いさはつて任務が重い 上日の十一時半頃入港した 天気は 爆撃に  
最良の條件をうけたが敵機は遂に合はなかつた | 情報によれば敵はバコ江一部隊  
隊を伴つて居る 八月下旬本國と出発したかどうかわからぬが 着いた處は釜山-舟楫  
隊助射隊は成功して居る 果敢三特係引上げに決した様だ? 二水隊の分の  
兵隊は 4隊ある

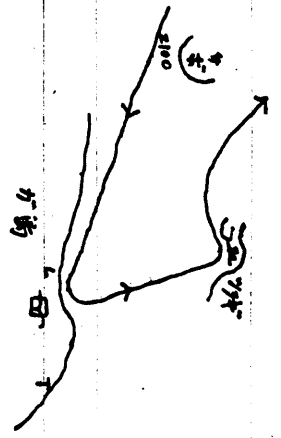
今日は未だのうかがふ何のもしの思ひを思つて居るや別未だ 1305 日-17 一校に居る  
誰か探知したか? 偵察して逃げて了つた 江コトコトに飛行基地が少くない 陸上  
隊と戦ふに有する基地が

22 17. 9. 7 日  
九一日の中へ出来るとある人へ バコ江を敵は考慮しないが 電雲の爲かや別





2147の4400が「全力即時待機」にせしむ 何の事はなし 鬼ヶ原軸線相念  
 人の30-30本を出た 敵が1900は天霧陽美を従へて第一部隊はつり言へば  
 虎の力は生き残り混成部隊に 一時五分敵部隊を察見した 川内は味方  
 能言小作れれば驚愕の標にすんべつに平素偵察は巧見れり U.S.Aの戦斗機不  
 なる 果に我々の位置をいつに報告された 川内がすまふらば 天霧は形  
 行機が敵機には絶好の位置をいつに報告された 鬼の去・夜に入つた  
 中本隊の南を過つて九時三十分の戦斗の号令がいつた 九時半頃(2135)右五度位



の行き。空がボーと赤らぶつた 初めは探  
 照灯が報告に来た 敵が北に下度  
 がわらわらと行場の方角に當つた 陸軍部隊  
 が突入した。敵の位置は合つた 鬼の去・夜に11時  
 0分 110°方向に敵が現れ、距離見出し報告して  
 来た 火災の午前、鬼の去・夜にいつた

我々も先水を取初は輪是船と見たりと云ふは近く見ると樹の影でしかるが故に  
 心かこ下には敵の居るが故に 陸上では敵の光をば見たりが司令は陸兵同志の談  
 事と云ふが故に 我々がツラシに向つて又敵の船は初行状が未だ 丁度十時ごろに  
 左舷首より右にかわつて見たりと云ふが故に 四角の飛行艇がはたのりしかるに敵は  
 見つけずかたはなし 敵艇はツラシに向つて 我々は故は港内深く入りて見たりと云ふ  
 事と見たり 敵は故は私利も馬鹿にた 港口に船は船が二隻居る 十時  
 十八分川内より60°方向(左30°)方向に敵の影を見たりと云ふ 我々自分取  
 ち離るに 照明弾を打つて 我々「船は船は是れ一歩進め、と云ふ 十時十分  
 ころ 照明弾を打つたのは二十四分ごろに 我々の吊壳の下に見たり 「左バシ  
 26° 艇影」ニツ、と見張りが報告した 三十分ころと左にかわつて 「吊壳下  
 右5度、と云ふ 我々も我々は左は実込人た 勿論敵艇もツ、港口、新  
 大丸取艇を取つて 「右95° 目標70、 針路300に直針して時ニ報告した  
 「右97°と36分ニ報告した 二の時 照射した 27分第一斉射が放たれた 二時射

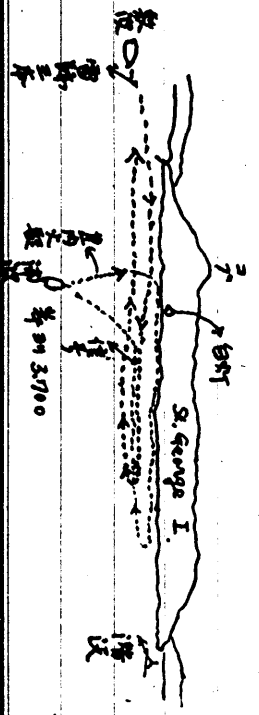
目の時難が「命中した」と言つた 後で砲術長は南と岸一斉射で二撃あつた  
と言ふ 一撃は駆逐艦下一撃は後部で「ボツボツ」の潜水艇を沈めた時、標に水柱  
一撃に機銃を打つた程の火花があつたと思ふと煙がさつと出たらしい 船撃は二  
斉射で終り、渡は後続艦にまかされた 入隻も居るんが、全部一撃でやると平気が  
起る 実には二斉射目の時は敵は動いて見えないやうな気がした 一團一寸見ると照射したか  
打つ迄は至りなかつた 39分 再び敵駆逐艦が川内に向つた 十時五十分右143°  
に火花が起つた 潜水艇が故障である 時と火花が見えるのは爆撃に引火して  
居るのに違ひない 我々は一番駆逐艦の方で「砲撃」の砲の駆逐艦一隻大火花他の  
一撃は川内へ進入するを認め、と報告したか後続艦。情報と線合打は「駆  
逐艦一撃時、火花、出た 我々は後の事で我々は二隻ではいゝと、島の上へ  
河の底をいかと探した 十一時十分川内へ「怪しい」見中、と島の上へ  
早先弾を打つた 十一時半には射撃場の火花も駆逐艦の火花も見えなかつた 射  
撃は310°に川内へ後へ、蛙行してから従つた 川が島附近は敵艦の集まらうと





中隊(海軍機動部隊指揮官 十日夜 67 飛行機) 廣電「第11」十一日 0830頃  
浦波に特急 今夜(カバ) が移つて来たがそれ以上は一條は至近弾で破片が  
甲板の上にはびらびらした状態 ころころ思つて奥身はにぶる大聲が聞こえる程の  
水柱が上をかく被弾ははかたつた 相手は船艦爆=様々響、向きの緩降下でやつて  
来るとは誰も知らなかつた それにて十日は終つた  
1800 白灯一4個 左145°に見えた 67 飛行機である 明滅して合図に在  
た 向くは 70°の距離に在る 南西半の暫く陸上を呼ぶ音が返事がある  
東南端に行列した時左60°に白灯が見えた 1858 である 氣をつけ見れば  
青白い強力な方向性灯で陸岳が気になつて持つて茶が白くつたが 発見  
したと言ふ煙しだが先は立つてそれにて近づいて内火艇を下した 信号音は相手は  
起信符 …… を二回程送つて来たと言つた 1907 内火艇は出撃した 此  
時 敵波が 爆雷を投擲した 激震が伝つた 船が内火艇は知らずに行つた  
敵波からは「雷陣」三本前方通過、を報告して来た 向くは 70°=四目、

内火艇を出した。之は、かた一、2隻を引いた行った。内火艇の方は一向合図がなると、  
 2隻が1958内火艇が級と、なかに送信を察した。「敵潜水艇を発見、直に前位置に  
 就く」2015級は未だ就くよれば、島の右端に浮上し潜水艇を発見し潜没せる様  
 様、味方は探せぬ見えず。2021内火艇は全部級つた。直に上りて出撃  
 2056大は377を威すか、敵の爆雷を判つた。水雷艇の詰よれば、白灯の  
 光が左の右へ右へ探して右端に近づいた時、島がけがら、のびり、のびりと浮上し、  
 出た来た。後部は見えぬが、つたが、能橋が低く、新甲板に大砲がなかつたと言  
 う。艦首の形が、米國の艦と、事、敵波の通信土も、認めたと、言ふ。





後で考へたのが教潜は二層にあり、自軒は左の一葉で我々の呼ぶところの教の  
 味方が出た見方が教の味を潜に作る教波を雷撃したの奴は何事か  
 此見の教の味を潜に作る水雷は「川口部隊」を連呼しながら近づいて  
 来たを起しから君代陸戦隊集合に至る迄吹かされた。此の教は右  
 の事だ。教波。雷跡を見たり信用しなかつたのは丁度本艦が教波。あるり  
 大の魚が魚雷の様。夜光虫と光をながす走つて居るのを数回見たりある。片一  
 我々は味方潜水艇の既備すよと判つて居るが味方の所教は居るすは  
 考へたの味方。此が戦斗は常戦では行かない。2100又この教波。威嚇的  
 投射である。2130第一。東南端に達し内火艇を下し。本艦味方の居る所は  
 5分間は教潜との確信が持てなかつた。内火艇が湾内に入つた頃 47 秒に  
 12行の電報が電報が来た。七水雷艇附近の煙台は7日夜の8日期にかけ  
 全部47 秒に12行の 47 秒に12は 570 名居る。川中隊も居る。電報は  
 240名を収容しはと2208判つた。直に本艦号簿の内火艇と0号人だ。2232



後方より海水噴射し全身を包み 前方に振り出さる

之を防止し防水もあつたものには 孔に通過せし出来ぬ 艦橋は航海長一人  
戦死。外多の水少の水破片を喰ひかき事 同日二十八日霧東艦中の大曾根秀  
謀の語では 「向い各 射撃力に 着くと 安心に司令室で眠る 艦中の大曾根  
が 予りて 艦橋進行の 見所 既司令 艦務主任 戦死 二番煙突が 破  
つた」と云ふ 大曾根秀謀は 青葉新隊の一 艦に上つた 夕霧は 至近弾が 艦  
艦橋に 爆弾を 命中し 艦斜を 爆元 した 水に入らぬ 沈没した 予りて  
云ふ 優秀な 兵科士官は 少い 艦に 艦長は せんか 予

17. 9. 11

十一日は 0647 B-17が 一機 左舷を 反航した 我々が 反撃した 方位は 1155°  
小型陸上機(爆弾を 持った 艦に 40°に 出た 方位は 1233 又 44  
左 30°に 現はれた 飛行場 方位は 遠く 91°に 仲を 執拗に 艦橋 降下  
方位 未だ 判りない 予りて 意味 悪く した 方位は 17. 9. 11. 1320 起

了気味悪いのが途、実現した 1233 のか作つて襲撃に未31114-1時間半位迄の  
 内に左舷首の座に費雪が突照取船に33-110の中心逃中込込人になり「和那航が近  
 くの」と誰かが叫んだ 40時異様に叫ぶ声は艦甲板の上で左舷艦甲板の  
 出た鬼は33-110直前の位置で出た敵艦が急降下して移り所がた 音  
 右岸の船尾が33-110を左に傾けたと思つたが、鐘の音は33-110の音が昔  
 ほど音の45°位の角度で突込込人に来た 薄黒い煙が33-110直前の船尾の  
 船に突つた石の棟に葉つて来るのは何と何と形容出来ぬ 艦首が細く工  
 コラ 相異なるがた 煙が二百米位の折の百米と思はれる所迄来た時船  
 はもう危ないと思つた 必らずと告げ予感があった 此れで羅針儀の左に行つて  
 33-110と下腹の力を入れたら33-110は後へ来たはず 衝撃はとらへた 艦尾は1234  
 ほどで艦尾の折にた 猛烈な敵艦心か起つた  
 艦長は私が羅針儀の折に行つた時取鏡一杯を合した 此れが本利の女の時

和行機は「一」と喰、右が右前には腹折れと思ひ、一番砲塔の左膝五本柱の所  
で「一」と大砲を動かして水柱が白く輝いた。三時三十分の時は水柱は腹腹中から  
合が下へ配置に引け、機銃が打ち出たのは六分たつた。水柱は腹腹中から  
一番砲塔の上へ「一」と落ちた。黒い粉末の標を下のが黒直ぐに落ちた。未  
大は御聲は取つた。後に見ると煤煙の相が大砲の破片が前甲板に落ちた。居  
驚いた事には船橋の後の旗甲板に落ちた。人々は被定は取つた。見ると折れ  
体は穴はあつた。あつた。あつた。  
直ぐ「一」の中は突込た。この「一」は突は凄かつた。指揮所。見張は  
和行機を動かしてあつた。腹折れ機は下へおぼろおぼろた。その内は敷波の電球  
の連絡が途絶えて司令が心配した。45分には数人が二層を降りて被定は取  
電報が来た。56分には「一」を取出た。飲み。一時間経つて居る。二層程短く感  
じられる。時間は取つた。日没は三十五分たつた。四時三十分は急性的に待て  
かつた。日没後三十分は期は取つた。暗く居る。暗く居る。和行機。方は











3000 然も飛行場よりは未だ 3000 米もある 明瞭迄には合體は覺つかない 我は  
 晴の嫌な気持がする 1500m 位の高度に在る陸軍の機は何なる事か 大隊  
 能の如くを以て巨艦と見せし小艦と大艦艦隊に於て然るに在る 翔魚の段。水軍の等  
 しい 今迄は之を以て勝つて 何かもういける 我々には武器も少く 精神の力も少  
 物量も敵に勝つて居るが 死にたいなら死ななう 物質文明を卑んたのは誰だ  
 見ろ 今戦い出すに居るものはいか 技術者も政治家も用兵者も國民も凡てが向  
 違つて居る 官僚や商人が政治をやまうもの 政黨も其の如く腹中がさうもの  
 凡てが向かぬ 之は結構は死に切れる 武器は有力な新兵器が 實に於て是れ  
 一統の偉大な軍が必要だ 實に計 然し人の力も重んじられは難い 暗に覺える其持  
 ち續て了る 也や半分の事  
 17. 9. 14  
 十四日 昨日の志を裏書する材料は飛行機が来た 0524 小型陸上機 (P-47) の  
 第一編隊 (1) = 1 機 0835 B-17 一機 0941 B-17 一機 昼事にて  
 5000 呎より此が書けやしない 衆に角切-1300 呎に入つた 1020 位ある 油庫にて

横付する 何を見ても向うは砲の程だ

17. 9. 14

この上は砲の音が水に響いて陸軍の砲一隊が川内におり司令と距離が測られ我が  
は直ぐ佐渡丸の近くに砲を投入した 陸軍を特象して直ぐ出港である 今夜川口部隊は  
突撃を遂行する 若し成功すればおのづから ----- 明軒我々は敵の空爆下にたゞされる  
陸軍の明瞭期に行けは我々はかまわぬ行かす 心でコロト直進する 道は二  
成功と失敗の間に水がある 要は川口支隊の決斗と連絡の是非によるのだ

17. 9. 14

十一日の急降下爆撃は六機が判つた 判つた 葉雲が知らぬに入る直前には見  
たのである 十三日敵機が来ぬと思つたのは越つた 午前中12 B-17が五機  
来た 題副機も見えた

17. 9. 14

敵は有力だ 襲撃時は混乱した 味方機動部隊の電報は敵が見えぬ  
判つた 友軍は Co. SP が入り念が入る 二日26月が見え  
る 敵は月が線々月が高くなる気がする

17. 9. 14

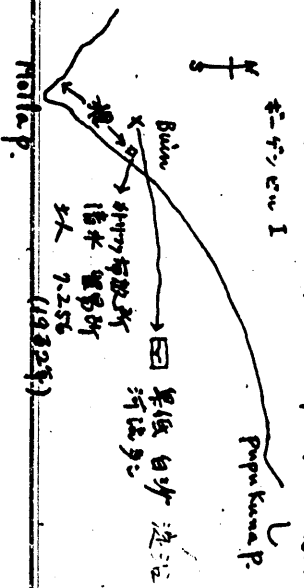
今日迄の発報数 49 今日 1115 客機が一枚在 600 米位で不時着した 燃料  
 及び水の不足 大衆の近しい降りにて人は直に上げられたが機体は大衆の着く前には  
 沈んでしまった 川内が我々と一緒に行かぬと言ふ方は在る 我々の引上り地点  
 及び時機が密報によつて示される 35d 司令部は自ら敵機の襲撃の途へは  
 見出しが我々の機密少く引上りしける  
 17. 9. 14  
 連日我が司令部に判つた見事に川内も一緒に行つた事だつた 4機が三機と  
 1機と白雪、叢雲である 将校 16 名合計 168 名乗組員を 主計將校 1 名を  
 仙台。青葉部隊である 隊隊長も未だ軍機が司令部に置かれ番台が立派  
 2300 出撃した 浦に数は大衆と見ぬが 我々の私の手想は通つた陸上  
 からの連絡は在る 友船は 十五日 0545 22-1324 近くで友船 今夜は本  
 川上 13 車と在る 0615 B-17 一枚 0930 大衆が具念慮したつた 十一時  
 には沈没したつた 1330 小型機二機 之が眼つて四時頃襲撃したつた  
 33 と思ふ 五時過ぎると 60-1 の乗組員は無事ながら 我々は 7-9 の見事な

濃霧の籠。早朝の曇り雲の間がらうと出て冷たい霧が降り急降下して来る。12時  
 に信じて居る。 霧が三時半の強烈な雨に変わる。 周建は三十三米の霧が  
 舞は舞ふ。 傾斜に進入し 視界は五十米程である。 之が先づ大丈夫  
 と思つたが先づ十分位で過ぎた。 余り早かたの未だ居る人は居るが此  
 が霧に迷ふ不安だ。 1930 年日本に焚火が見え 霧雪が先行して 僅か其  
 は11-7の注書し、千二百三百の所迄近づいた。 2015 第一回以後 2043 第三回 2100  
 第四回 2125 第五回 2136 第六回 2208 第七回 が夫々出撃して 軍旗は 2100 二内  
 文に果て 周建は 12~6 月あるが彼が少く割合で復讐し 行くに我々は 2305 二  
 は完全な格闘して 若くは 50 年ほどは 11 月 11 日の白雲が 12 月 12 日 大祭に待て  
 居るが 全部整備して 0045 迄 岸に 50 年 11 月 11 日の南東に 現れ 敵艦送  
 る。 仁小市が 出来た。 川内が一掃。 未だ居るが 白雲が 12 月 12 日 敵艦送  
 る。 敵艦送るが 11 月 11 日 敵艦送る。 又 12 月 12 日 敵艦送る。 12 月 12 日 敵艦送る。

12月11日 0520 小型機一枚 突出之の曲者 0618 8-17 一枚

所が昨日敷波が放置した大梁を拾ひこみ七袋を減速した時雲の向が十級  
概ね北東に北風 当直将校が無線機を動かして配置した船中も今より北東に北  
風吹かれ北東に北風内は急降下と雷撃の降る。冷風 私は土管をこぼし出  
る機心の底に 黒木が甲板のすわりの間に機務の船の上で 0800 である すると直ぐ  
に嵐の左舷に三十米位の氷柱が上った 0802 が第一層の嵐の近くは数層落  
下た 大に急降下をうけた 敵機が右翼の翼を向く頃には既に機銃を  
用事出来た底にのこせ進行運動を計て大丈丈だつた 尤も大部打つた 一機大煙を  
噴きながら右舷に流水を吐きながら私を見ながら 嵐や海風 江風の近くには至  
近弾の音が大部のうた冷風 被害があつた連中は 0806 に前方を雷撃  
が一歩通つた 之は取巻を避けた 之は敵機には雷撃機も居る事を知らぬ  
ある 船は十分の船尾を一本通つた 且張員は大驚きしたか近くは方向が果つて  
底の船も取つかつた 地味は  $9^{\circ}31'S$   $156^{\circ}54'E$  である 船は北東に八級に  
思つたが案は急降下爆撃機八機 雷撃機六機であつた 0822 母は 230 度 何

7月3日の今迄の作戦は危険な事だ 4000人は敵軍母が近くにいる 3000人は在りて  
 言へる 私は百位の追出は多然の事七百五十個圈内危険は免れぬが  
 怪しいと思ふ 400米圍の飛行機が7000の敵銃砲巨砲 300400個位は思はれぬ  
 十五日1700個味方への攻撃は300000型母が1800個位は在りて 大い思  
 慮る 敵のC7dも退退し 久い所の快砲22ある 多し作戦は母軍取  
 り現在も状況は困難な中 重火器が上る迄一層入札を言ふ形に在り  
 方々の基地の完成を急ぐ 心配なものは700基地で中札は1500かと言ふ事である  
 大規模の7000を以て中札は簡單に取れると思ふ 2500は700が完成する中定である



昨夜 妙木の上 踏んかき 先生 格杖 には 世に 生事 用ひて 来り 独工隊。 妙木上陸は  
 成功なり 特働の者も 凡の上なり 結局 大勢一集 行方不明なる 沈んか  
 ち 和ん 独工隊、大勢は 妙木に 亦置はり 南の 木に 引込場に 陰に あり  
 妙木には 是は 敵の 出陣なり 電信の 居る (海軍の 三百米 位置) 電報を 打ち直  
 心 敵の 味方 海軍の 煤油 燈の 光を 東に 三軒 並列 行くと 口-口-口-口 の 敵の 敵舎  
 あり 其の 宣教師の 名は 不明なり 母の 出来は 二日前に 敵を 誘導して 此  
 方より 新聞記者の 居たこと 第一線に 新聞記者の 二三人 居るなり 舟艇 機動  
 上にて 併隊は 船行 場迄、進行 するが 不利にて 大部 退却して 居るなり 妙木には 敵の  
 上陸を 拒んか 付け 此の 二方の 投擲の 攻撃の 程は 在り 妙木には 沖 2~300M  
 の 敵も 入り 此れを 射し 敵の 居る 處を 之を 退けるが 妙木に 昨夜 大勢は 二隻 来り  
 一時 敵も 是れを 射し 8F 24x の 馬鹿 中を 命の 爲に 陣を 守り 喰はせ たり 妙木  
 妙木の 奇功 あり 妙木に 本隊の 一が 敵の 陣に 入り 妙木の 下船 相陸



左に交る内の上にて群雀の下に陰水に居る陀岳がある 何れ持て居る 今朝は  
 群雀の吐くものが数筆ばかり出て進出たと書か 何と聞くとオチトヒに何の事  
 にも言はれ出さず 既にして一種の精神分難症である 二番群雀の下に出た木は  
 葉の乾物と起して知らぬ手拭の包んで居る 油に水が下の上の何の敷いた横  
 座の底のかわかぬ見返し 眼が大きい整った目をして居る付かたも木柄の籠が  
 弱く神経質な感じが  
 17. 9. 14  
 別室村下にある太陽の下。知らぬ主眼の事が私に現在を覆つた 既に入園行つた  
 全群雀の 前の上の天 天の一本はもう上から 既の本が同様に運命の運るや  
 びり 今の内は今晚にて進洋紙の刺繍紙の刺繍して大巻の上のさか木母心  
 の刺繍紙の刺繍は我々を怖かた南に進洋紙 木上紙居ると知らぬ東方120里位  
 作るべきだ 知らぬ底を宣教師は知らぬ可能性あることと考へて 発行校に  
 文を 17. 9. 16  
 司全の得た「おの。敵状」

敵は涿州を二ヶ師團兵の軍の補房 900 は涿州に送る 母國の通信電流を通じて  
 なる鉄壁網の 戦事相とあり 陸軍は彈藥糧食 医薬品共に不足之を  
 地下工場の如くも搜括し行動不自由 之を要するは物・費と人の甚なる指神力  
 が数倍の例にあり 陸軍の人の強いのには甚し 陸軍は最近育たぬ人が馬鹿に  
 なるもの 対策には 所の基地の完成を急ぐと同時に 一時間以内早く電火  
 器を保持大兵力を輸送する事がある 我軍の補房が九百も涿州に送らば以上  
 涿州を全射撃すべきに 而して涿州も古来の兵隊は居りぬ 然し何て補房を  
 どの様にかの 何故敢て進戦はせむかの 之は何に國民に報告すべきか 兎に角  
 彼等と日本に生ずるは必ずには甚し 北に靖國神社を祀るべきものには甚し 賢第  
 が清人の時に来るべき 此の如く涿州の因念が 北平島を在りて労働する國には  
 行方不明に此を報すべきか 何に此を遺憾な事がある 小中 正月一等は十六日  
 天霧の雨に此の如くは行つた 今日十七日は10-13の雨に來て始りて一日滯留に  
 未だ幾も六時間あるけれども此れは 命令が來るまでは最初の休日である 此



船団と連絡の行つた潜水艇もあるが、今日は黄海に戦死念日である。軍報  
 によつて、敵艦隊は150~200隻あり、急降下爆撃を食ふ。  
 標的は、敵艦隊の予想がどうなるか、十九日はY日とY-1日Y+1日  
 はYの大攻撃があるから日進も何の種も出さず、この作戦が成功すれば  
 北は日本に有利な度である。陣を動かさぬ。司令は盛に敵艦隊に怖れを  
 与へるが、不甲斐なと思ふ。現状報告。艦隊を「引く」とはし、  
 糧食、野菜の総量が偏してつた。と言つて居る。これと艦隊は大塚を味方  
 「脅す」とは言はせぬが、南波艦隊は非常にいい艦隊と思ふ。之と友  
 隊とのが、後波艦隊である。これに「おまげ」を釣つたか、これは  
 大一同じ「シノガサ」の標的である。水の中を釣れる。後波は毎日200  
 四十米も下から来るから腹がふくらむ。死んだ標的は上から来るが、腹を圧して  
 ると間もなく死んでおぼれる。之が上から来る途中で何のゆゑか、下半分位食はれ  
 て、小さくなる。腹が居るから、これがおぼれる。腹は重である。食を

也る 岳の一尺位の鉄棒を釣を作つて魚を二匹もとりに 藤を釣すに居るが  
 船が神給に何人の船が居る内に止りて居る 今度作戦が初めから何  
 と云く煙草を止めて居る 何と云く である 一寸一服や度い事であるが  
 は大船が空におく 昨日は一日縛下中が居る 江戸下り船地も居る 今度  
 は手紙を書いた 「これでも所を比して居る事と云つてやうな = 十日  
 「あけはの丸」が昔に回航する 十八日には「日暮丸」が佐世保に行人 寫真と  
 軍票を回航した  
 17. 9. 17  
 島津連が入つて居る 進軍過つての味居る 輸送にてもちて居る味は「役」に立つた  
 今日敵營にこれ付れども 幕はあいてすつて刺さるが居る 一定距離(0.7程)位  
 迄の間に仲を生かして居る 待てし  
 之を丁史 第五が終る

八月十三日のおりあるから末に一月に居るが 今度の作戦に居るが花の標に  
 あり居る様がある ちの内地に置つた 一十も居るが 2000に置つて置つた

○在使は本領の及 荒蕪の不便之處に 入る所の不便は方分なる 東岸に  
置る所の 大方讀心に 了つて 右は内陸に 才中の川流に

19. 9. 17

